

25  
コンゴ

## バビー・フット——ブラザヴィルの「ゲーセン」と職人気質

武内進一

中部アフリカにおける最大の娯楽産業といえば、おそらくザイール音楽（リンガラ音楽）に代表される音楽産業であろう。今や全世界を席捲するアフリカン・ポップスの震源地は、中部アフリカ最大の都市、ザイールの首都キンシャサである。

しかしながら、私が住んでいたのは、キンシャサと川をはさんで向かい合うコンゴ共和国の首都ブラザヴィルであり、隣国のザイール音楽のことを書くのは若干気が引ける。そこで今回は視点を變えて、ブラザヴィルの少年たちの娯楽について報告したいと思う。

少年たちのサツ  
カー・ゲーム

「バビー・フット」（これは Baby-Foot のフランス語読みである）という名前になじみがなくとも、実物を見れば「ああ、あれか」と思われる方も多いのではないだろうか。いわゆるミニ・サッカー・ゲームである。縦一メ

ートル強、横七〇センチ程度の箱の中に、十一体の人形が、フォワード三体、センター五体、バックス二体、キーパー一体に分かれて四本の鉄棒で操れるようになってゐる。この鉄棒の操作によつて人形を動かし、相手のゴールに球を蹴り込む。一五CFAフラン（約一三円）硬貨を機械に入れると、一〇個のボールが出るようになってゐる。

ブラザヴィルの下町を歩いてみると、道端や交差点にこのゲームが置かれており、少年たちがそれに群がっているのをよく見かける。のぞき込むと、彼らの「バビー・フット」操作の技術水準はかなり高い。人形が取り付けてある鉄棒の動きによつて、人形は左右に動き、また回転してボールを蹴る。少年たちは、手慣れた様子で鉄棒を操り、球を受け止め、見事なパスを通し、強烈なシュートを放つ。ボールはバックスにありながら、先にフォワードの人形を回転させておいて、そこにパスを通し、そのままシュートさせる、などといった離れ技もみせる。ゲームには相当の運動神経を要するようで、私などは口を開けて見ていただけである。

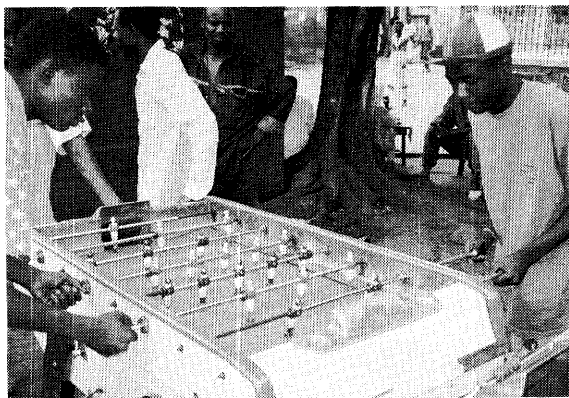
このゲームで遊んでいる少年たちは、概ね十五歳前後のティーンエイジャーである。ゲームに関しては、洋の東西を問わずこの年代の右に出るものはいない。交差点などにこのゲームが四、五台並べて置いてあり、そこに少年たちが群れている様子など、日本のゲームセンター、いわゆる「ゲーセン」を彷彿とさせる。たまに、髭を生やしたい大人が汗だくになってこのゲームを楽しんでいるのを目にするが、これなどもネクタイを締めたサラリーマンがゲーセン

でテレビゲームに興じているのと共通点がなくもない。ただし、ゲーセンに一人ポツネンと座る日本のサラリーマンはわびしさを感じさせるが、こちらで「バビー・フット」に打ち興じているおじさんを見ていると笑いがこみ上げてくる。

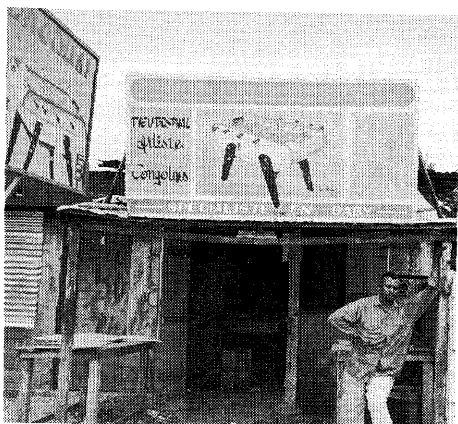
### 製造者の職人気質

「バビー・フット」はアフリカではかなりの国でみられるようだ。かつて、私自身キンシャサとヤウンデ（カメルーン）で見た記憶がある。サッカー好きのアフリカ人の趣味を反映しているのだろう。このゲームは、おそらく元々はフランスあたりから入ってきたものと思われるが、現在では機械も現地生産されている。

製造元の一つを訪ねてみた。ブラザヴィール市ウエンゼ地区にあるボスファル社である。「社」といっても、社長兼社員のバブカナ氏が一人で切り盛りしている。まあ、工房といったところであろうか。



街角で「バビー・フット」に興じる少年たち



バブカナ氏の工房

「『バビー』のことなら、俺んどこに来るのが一番だよ。何でも聞いてくれよ。こいつを仕上げるのにか？ まあ、だいたい十日から二週間で一台中とこだな。何しろ俺一人で全部やってるからな。この仕事を始めてから、もう十年以上になるかな。ずいぶん長いよ。うちがえらく貧乏でさ。俺は頭は良かったんだけど、学校に行けなかったもんだから。『バビー』はガキの頃から好きだったし、じゃあ作ってみるか、ってんで始めたんだよ。もう何人かに作り方も教えてんだぜ。

俺は、『バビー』のデザイナーでな。いろんな格好の『バビー』を發明したんだ。魚の格好か。それから、『ひつじバビー』とか、『わにバビー』とんだぜ。」

エネルギーにまくしたてるバブカナ氏は、職人としての誇りに満ちていて、好感がもてた。製造した「バビー・フット」は、だいたい一五万CF Aフラン前後で販売される。製造過程は手作業がほとんどで一定の技能が要求され、さらにブラザヴィルの物価の高さを考えれば、なかなか従業員を雇うことは難しいだろう。

こうした「バビー・フット」の製造元がブラザヴィルにどのくらいあるのか聞いてみたところ、「知つてるところで二、三軒、全体でもまあ一〇軒程度じゃないの。」ということだった。いずれもバブカナ氏のように一人か、多くても従業員数人の零細企業である。国全体の経済から見れば、ごくマージナルな存在にすぎない。しかしながら、石油採掘以外にみるべき産業もなく、非耐久消費財に至るまで輸入に依存しているこの国で、バブカナ氏のような職人気質をもった人が確かに存在していることを知って、私は少し安心したのだった。

(たけうち しんいち／アジア経済研究所在パリ海外派遣員)